

貫いてきた。

性格は、正義感強く、温厚で気さくな人柄。私生活は質素で家族思い、一時市会議員に推されたが、本人は、ついで諾しなかった。

公私にわたり信頼され、引揚者団体東根市支部長、兼山形県連理事、遺族会大富地区支部長、老人クラブ大富地区連合会長、その外東根市長の要請をうけ、大富公民館長、東根市老人福祉相談員等々をつとめ公共の奉仕者に徹している。

自家の商店経営は夫人に任せ、幸せ平和な生活、終戦時満州の山野を逃避行中、妻と三人の子供を見失い、単身で引き揚げた断腸の思いを秘めて、妻子の冥福を祈る生涯はいかなるものでもつぐない得ない傷痕の引揚者でありながら、何人にも口外しない識見の持ち主である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

満州国竜江省甘南県太平山村三合屯 三合東三河郷開拓団顛末記

愛知県 瀧川 辰雄

満州国竜江省甘南県太平山村三合屯、三合東三河郷開拓団に対して、昭和二十年八月十四日、召集令状が二十八通、団本部へ届けられた。我が団への最初の召集令状は、昭和十九年頃からの召集令状であり、我が開拓団に対しても全戸数、百四十六戸、老幼婦女子合せて五百有余人、その内、男としては百二十余人で、もう召集されて戦場へ旅立った者が八十余戸であった。

ところが昭和二十年になると、引つ切りなしの召集令状で、どこへ行くともなしに男は消えていくばかりであった。ところが八月十四日には、八月十七日チチハル軍司令部へ入隊すべしという通知が男という男にあり、後に残った男は、十五歳以下と三十九歳以上の

者だけの四十余人であり、私は目が悪くて兵隊検査で丙種不合格の兵役免除者であったが、それでも召集令状が来たのである。

今までは黙々として秘密裡に立ち去る如くにして開拓団を出て行くのであるが、この度はどうせもう日本の敗戦は満人たちにも予知されているのだから、というので開拓地としても盛大な送別会を、明日以後は家族とも、周囲の人たちとも、同志とも最後の宴であるというので大々的にやるべしと決定した。

宴まさにたけなわ、おたがいに泣き顔だけは見せないといふと、必死の心と心の争い、それは雄々しいといふにはあまりにも悲しい運命協同体として、背負い切れぬ苦難の嵐の中を雄々しくも歩み来つ、あつた満州開拓者集団の日本婦人としての背負い進まねばならぬ受身の姿であつた。

誰からともなく静かな歌声が流れ出る。

「こ、はお国の何百里、離れて遠き満州の赤い夕日に照らされて、友は野末の石の下」

合唱は次第に大きく低く哀しく、歌に託す日本女性

たちの心の底をゆるがず悲痛な叫びであつた。大陸の若い花嫁たちの淋しさ、悲しさ、やるせなさを押し殺しての心のつぶやき。子供たちも私たちも歌に合わせた。そこにはどこにもぶつけるところもない心の奥底を歌声として；突然私の部落の最長老の夏目正夫さんのお母さんが、引きつけを起こした。

歯をくいしばってヒヒヒというような声にもならない声を出して、若い女達の間に何ともいえない悲痛な混乱が起きた。こらえにこらえた心の堰は切られた。嗚咽となり、号泣となり、大きな波のうねりとなつた。

無理もない。夏目正夫さんは早ばやと出征し、今度又弟の富雄君の所へも私達と共に、召集令状が来たのであつた。十一人もの女子供を抱えた二人だけの男が召集されたのである。老母の心の内は果して如何であつたらうか。この十個集団で一万五千人、入植計画だつた開拓団に最後の二十年八月十七日の召集を受けた私達百十七人が、平陽鎮開拓本部に集合して情報を聞いたところ、天皇陛下の詔勅が降り、無条件降伏をしたという情報も流れていた。真偽のほどはわからぬの

で如何すべきかと議論は色々とおつたけれど、軍司令部からの解除命令がないのだから、このまゝ、帰るわけにはいかない。寧墨線の拉哈駅まで行き、十個集団の拉哈弁事所で様子を聞いた上で態度を決定しようという事になり、拉哈弁事所まで行程三十キロを進んだのだった。この甘南十地区開拓団の連絡所として、所長をしている本願寺布教師、一色覚順師に会つて指示を乞うた。

今君達がチチハルへ行けば、一戦もまじえずソ連の捕虜になりに行くようなものである。ここからすぐ開拓団に立ち帰つて団の対処を考えなさいとのことである。私達開拓団のため真剣に働いてくださった一色先生は、進駐してきたソ連兵のため、銃殺されたということをおとで風の便りとして聞いた。自分の信念に生き、開拓団のために死地に残つた一色覚順師の冥福を心から深くお祈りせずにはいられない。十個集団で百十七人、ソ連の捕虜にもならず元の地へ帰つて来た。

私達の東三河郷開拓団でも二十七人もの男たちが帰つて来た。早速四十余人の男が集合して、無条件降伏

後の対中国人対策や、団の今後の防衛、家族を今後どのように守るかなど、色々とお話を聞いた。幹部は、年令が古い人たちが多く、団長関谷城三、校長永江土岐次、計理指導員伊藤政市、畜産指導員鈴木喬、学校訓導七原忠雄、同じく林武一、乾定治郎、農事指導員、将来町村制がしかれば村長候補庶務係の金古誠一。

無条件降伏後のまったく日本人として未知の難局乗り切りの対策会議が開かれた。私たち日本人は天皇陛下のお示しになつた言葉をそのまま、守っていくのが本道で、まずこの真実を無視せず、自らの体に心に銘記せねばならない。無条件降伏という現実を直視して行動しよう。四百五十人余の今まで同志として歩いて来た開拓団の団員応召者の残した家族を二人三脚どころか全員一脚として歩まなければならぬ。そんな生命が四十余人の男の双肩には鉛のように重くのしかつている。それを根本議とした考えの基調として、一切の言動の始めとせねばならない。私たち男たちだけならば異なつた道、考え方も幾多あるであろうが、現在そんなことは望むべくも無いのだ。現在故国がどのよ

うな状態か、自分たちの現在と日本内地の出来事など想像するだけで身震いの出るようなことばかりである。

私たちは何といつても故国の土にこの足跡を残すまでは、皆さんを死なすことはできない。いや、死ねないのだ。皆さんこの一事を心の奥底に深く銘記して無抵抗主義を貫き通すようにして貰いたい。今日以後は満人との交遊を密にして情報を掴み、情報交換をすることを申し合わせて一応解散したのであった。

おみならば只おろおろと泣き伏せど
苦闘の我等涙も出でず

敵国に取り残されし同胞の明日の

玉の緒いかがなりゆく

玉砕と思ひし胸内幾そ度遂に決意も

なし得ずに生く

母国恋しと語る可憐な花嫁の声ひし

ひしと胸にしむけふ

叫びたくなるよな胸のものもんもんを

なお耐えぬきて生きてゆかなむ

八月二十三日泰平部落襲わる。

無条件降伏後、わずか八日ほどで、本部より一番遠い十四キロばかり北西の泰平部落が最初に襲われたのであった。この泰平部落にはさいわい中年以上の男が多かったので、苦もなく満人を撃退して全員傷つくことなく済んだのであったが、この宝山鎮地区の買収の張本人が私であったので、私の心の古傷に刺がさ、った想いで大変だった。

八月二十六日頃、夏目幸夫さん惨殺さる。

私の後任として土地管理係として夏目幸夫さんが、私の土地接収の後始末をやったのだった。その夏目幸夫さんが平陽鎮の總本部勤務員をしていて、總本部より自分の部落へ帰る途中に土地接収したところの満人に襲われて体中傷だらけになって創傷十八か所、全身蜂の巣になって死亡したのであった。

無惨にも十八か所の創傷は二目と

見えぬ友の亡骸

泣きふせる遺族の姿目に痛し明日は

我が身かはかり知られず

敗戦の哀れさいたく身にしみぬ友の
弔い戦もならず

亡骸に回向の声もかすれつ、すがり

離れぬ娘 哀れなる

憤懣のやり場もあらぬ無念さに

一文字に噛む唇痛し

九月三日加藤定司君説得

もう十個団でも、兵器類は中国政府へ取り上げられつゝ、あるという話も聞かれ始め、日一日と不安は増大していった。私は元宮部落九十余人の防衛のため、満馬に乗って本部へと馬を走らせたのだった。本部事務所では加藤定司さんが部落長をしている泰平部落員夏目幸夫さんを殺した満人が判明したので、その満人を捕えに行くのだと言って泰平部落の団員、大原劉治、丸山智易、永田儀一、と四人の泰平部落の実力者たちが来ており、本部員庶務の金古誠一さん、経理指導員の伊藤政市さんや関谷団長さんと声高に話をしていく。

私は「何事ですか」と話の中へ割り込んだ。

加藤さんいわく、先月末東三河開拓団として第一号の犠牲者となった夏目幸夫さんの殺害犯人が、附近の満人の通報にて判明したので明朝サイレンを合図に行動を起して、その犯人を捕えて来る。その相談をしているところだと言う。私は驚いて「加藤さん現在日本人の置かれた立場というものを考えて見たことがありますか、君たちの復讐したいという気持は、私としても胸の痛くなるほどわかります。お国のためと応召した八十余人の団員の家族集団を、最小限度の犠牲でくい止めて、故国日本へ連れ帰る義務が残された男の双肩にずっしりと重くのしか、っているのです。今、私たちが仇打ちなどと言っておられるものか、絶対駄目である、これだけは一步も譲るわけにはいかぬ」思い込んだら絶対に後へ引かぬという私以上に頭のかたい加藤定司さんであるからと、関谷団長ともども、最も激しい口調で説得したのであった。さすが向こう見ずの強行派のナンバーワンの加藤定司さんも、「団長や瀧川さんがそんなに言うなら不本意きわまる気持であるけれど、明日の仇打ち決行は諦めよう。」と言うので、

ほつと安心した。

九月四日、加藤定司他十七人平陽警察に拉致さる。

昨日の団長と私の切なる引止めはまったく無視して、四日早朝四時頃、本部のサイレンを鳴らし、泰平部落の人を主として、他の部落の応援を得て、夏目幸夫さんを殺した満人六人を逮捕してチーボー山部落まで意気揚々として引き揚げて来たのである。満人部落でも黙してはおらず、ただちに平陽鎮の自治委員会に通報され、公安隊の自動車に、チーボー山部隊で出かい、有無を言わず逮捕され、平陽鎮警察署の留置場へ捕われの身となったのであった。皆で二十三人で行き、内十八人逮捕され逃げる途中を、一人先遣隊の片桐芳二さんや、私より一歳若い団員は、後から銃撃され一発の下に射殺された。彼等は戦勝国の国民である。それに引きかえ日本人は敗戦国民である。八月十五日を境として、まったく正反対になってしまったのだから。そう思うと無性に腹が立つ。十八人もの精鋭がいなくなった後の東三河郷開拓団の今後に想いを致すと腸が煮えたぎるほどの思いにかられた。近くに、しお

れ返っている四十幾歳にもなる丸山さんを大声で罵倒してやりたいくらい腹が立った。自分勝手にわがま、人生を歩いて来たような加藤定司さんが、時が時だけに無念であった。

昨日は自重を切にたのみしに無念な

るかな無謀の襲撃

孤立せる四百余名の命綱われらの

背に在るを知らずや

沈痛な関谷団長の願いたく思わず

ほほをそむける程に

夫たち親たち子たち拉致されし

家族の心不憫のきわみ

死の姿一発の下息絶えし静かな

死姿なぐさめなりし

東三河郷開拓団十八人の男たちが平陽警察署へ連行されたということは、我が開拓団最大のショックであった。特に平陽警察へ連行された者の家族たちは、夫は果して無事に帰って来られるか、息子の安否は果してどうかと、この十八人の内には、父と息子と二人、連

行された家庭が幾組もあった。日本開闢以来、未曾有の大困難に対し、誰も対処できないのである。

私は何としても、彼等の許しを乞わなければならぬ。彼等十八人も男たちが帰らないとすると、東三河郷開拓団全員自殺も、場合によっては決行して果てねばならないまで追い込まれるかも知れない。まず彼等が金を望むなら金を出さねばならぬ。物品がほしければ物を差し出さねばならぬ。何にしても十八人の許しを乞うことを考えねばと云うので、緊急全員協議会を開き、相談をしたが誰も一言として言い出す者がない。終戦後間もない事件ではあるし、今まであまりにも戦争に負けた敗戦国民であるという根本を考えなすぎた。幾度か協議会を開いたが、あまりにもシヨックが大き過ぎて、何をして良いか、見当がつかぬのである。日本人の悪い面だけが、前面にクローズアップした形で現われた一場面であるだけに、只悲しみや過去にこだわりを持つだけで、救出の重要問題が五里霧中で進展しない。

私は満人の有力者にまず頼みこんで、平陽鎮の自治

委員会長警尉と、公安隊の隊長萬育仙さんの二人に面会を申し込み、何としても面会して、当方の言い分も聞いてもらい、彼等の言い分も聞いて、何とか許しを乞う方法をするよりほか、今のところ考えられないからと皆さんの議題として出したのであった。それでも皆さんより決定的な言葉は出ず、仕方なく私は、この問題はむずかしいが、早く解決しなければならぬ問題である。黙っているのは仕方ないではないか。それでは、私の案をお話しようと言い、まず団の全部の持ち物のうちから、賠償とする金の相当分を出してもらう、当事者は当然丸裸になることを覚悟すること。この際、特に当事者は隠すことなく丸裸になること。誰彼と言わず私がこの事件の解決に生命をかける。満人の友達の金本枝屯長と、私が黄蒿溝の人夫の書記であった時の日本語の達者なスイシヨウウイという者と二人に頼んで道聞く。中国人だとして平陽鎮警察署への折衝は、金さんやスイさんも、危険な綱渡りであったのに、私に対する一遍の義のために、命の瀬戸際とも云うべき危険をよく乗り越えて正義を尽くしてくれた。この五

回の平陽鎮行きの中に、一度も幹部は行かず、最後の日に当然初代の村長となるべき男、金古誠一さんを、私が無理に連れて行っただけである。その結果、九月に嫌江へ橋をかけるから、その橋が大体九月二十八日完成の予定であるので、二十九日には十八人全員許すということを確認してくれ、ほっと安堵の胸をなでおろしたのであった。金本枝屯長殿、スイさん本当に有難う。

九月十五日ソ連兵来団

甘南県十個集団支配のソ連軍司令部が、甘南県東陽鎮に置かれていた。そのソ連司令官が、部下を大勢連れて、初めて、東三河郷開拓団へ来団した。終戦後の日本人としては、命の綱ともいふべき鉄砲も拳銃も、日本人の魂として大切に持って来た日本刀も、全部を提出すべしとの命令があった。銃器類を提出すれば、もう日本人である我々の頼りの綱はブツリと断ち切られるのである。今日より、いよ／＼丸腰丸裸の日本人になるのだ。今までは、匪賊の襲撃を受けても大丈夫。鉄砲がある。日本刀がある。と、極めて危険な考え方

としても、溺れる者は藁をもつかむという昔からの諺どおり、まだ／＼日本開拓団には銃器がある、無傷で存在しているから大丈夫という心のよりどころがあったのだが、それも今日から無になってしまうのだ。

私たち農業開拓団として、最高の伴侶として終始座右に付きそうといつても何等過言でないところの妻がいる。その次は何といつても日本馬である。その日本馬も、ソ連へ連れ去られるのである。何と悲しい結末であろうか。私はこの時、日本馬が三頭いた。日本馬だけは、我々開拓者が、最も頼れる、最も愛のきずなの深い、常に一体感を持ち、毎日農耕に隣近所への交遊に、本部集合に、常に私と彼というほど一体感で暮らしたのだ。その日本馬とも別れねばならない。只々無念残念の極地である。それは我々大人だけのものではなく、開拓地の子供たちも同じで、一体化した心の支えであった。開拓農民は、男も女も子供たちも、まったく涙々々の別離であった。これも敗戦国民の宿命である。さようなら。たとえ遠く別れても、元気で一生を送ってくれよなア……。―南山よ、元号よ、南山二

世よ。」私は三頭の日本馬にそれぞれ深い別れの挨拶を交した。そして、乳牛三頭、朝鮮牛子牛と共に五頭、満馬四頭を持って行かれた。東三河郷開拓団の中では、個人経営として、一番であったし、十個集団でも最高の農業経営者であった。

ソ連兵に乱暴されては困るといので、彼等を接待すべく、もう数も少なくなつた細羊ではあつたけれど、早速細羊を殺して、料理を作り、支那酒を中国人の家で買ひ求めて、酒宴を開いて歓待した。彼等ソ連兵は、服装は日本軍人とは大違いで、背広服、詰衿服、葉葉服あり、靴も短靴、ズック靴、ゴム長靴というように、まったく粗末な服装で千差万別であり、これが兵隊かと疑うほどであった。ところが、どの兵士も、マンドリン銃や拳銃を肩にした機械装備の完全な兵隊たちであつた。兵士たちは、実に無邪気で、団の子供たちとすぐ仲良しになり、手を取り合つて遊びたわむれていた。中には幼児を乳母車に乗せて、幾度でもあくことを知らぬように、あちらこちらと引き廻している兵士も見受けられた。子供たちと手を取り合つて歌い踊り

実に楽しさこの上もなしという光景を見せている。私は、きっとこの兵隊さんたちは、子供の父親でもあろう。家族が遠い故郷にいる人たちであろう、遠いソ連の故郷への夢を思い出して、はるかなる郷愁にふけてゐる瞬間でもあろう。ほんの一時でも、心のなごむ時があれば、戦場の荒涼たる有様ありさまを忘れる思いがあろう、と心暖まる思いに、私の感情もなごむのであつた。

さて薄暮になる頃であつた。出来るだけ無難にこの場を切り抜けるようにとの心遣いのお陰で、何とか無難に済むぞと一安心していた。若い女たちを頼んで会食の用意をしていると、「僕が作る」と言いつつソ連の若い兵士が炊事場へ入り込んで来た。早速いろいろとソ連式であろうご馳走を手ぎわよく作り、会食は始まつた。酒が入り宴正にたけなわと思う頃、ソ連の一人の兵士が、突然炊事を手伝つていた田口町出身の丸山寿さんの奥さんの手を取つて室外へ連れ出さんとしたのであつた。丸山ふじさんは驚いて、そばにいた私に対して「瀧川さん助けて」と、とっさに私の手にし

がみついた。私も室外へ連れ出されながら、ソ連の兵士に対して、手ぶり身ぶりで「僕の妻である許してくれ」と哀願したが、彼は「お前の妻なら丁度良い。俺に貸せ」というようなジェスチャーをして、真暗やみの彼方へ連れて行くとする。丸山さんは悲痛な声で「助けて」と叫んで、私の手を取って放さない。私もどうしてよいかわからないながら、トッサにソ連の司令官に頼むより他に何も手段はない、と思いつき、丸山さんの手をふり切って屋内に飛び込み、ソ連の司令官に対して「今、私の妻が貴殿の連れて来た部下に凌辱されんとしている。貴国の主義は、男も女も平等で、男も女も同じ権利義務を持っているという事を聞く。誰の主権も犯してはいけないし、犯されもしない、という大原則に基づいているという。世界民族平等の信条を第一の柱と聞く。しかるに、今この大衆の目前から、嫌がる婦人を誘拐拉致するのを共産党の幹部たる貴殿が平然として見逃すのか」と詰問し、「早く助けたくない」と貴殿共々大変なことになるから、もし私の妻にことある時は、貴殿としてこのままでは済まされ

ないから」と言うと、さすがの司令官も自分の目前で連れ去らんとしているのを目撃しているのと、私の表情にあまりにもけわしい切羽詰まったような厳しいものが感じられたであろうか、すぐ表へ出て大声で何か叫んだ。突然私の方へ拳銃を一発発射した。私はやられたと思つたが、弾は私の胸をわずかにかすめて飛んだ。もう少しで私の苦難の人生は終りをつけるところであつた。

団長も学校長も、団の幹部も団員も、全員ソ連の軍人を供応するために集つていて、その面前での一瞬のドラマであつた。居合わせた女たちが「アッ、瀧川さんがやられた」と思つて駆け寄つて来た。上官のいる目前での事件であり、上官のいる前でも平気で婦人をさらつて行かんとするソ連兵たち、戦争という猛々しい亡霊、その元となる兵と名の付く乱暴者は、絶対に許すことはできないという思いで一ぱいである。苦しみに苦しみ、人の死亡、財の莫大なる損失、そして悲しみの極点にただよう人の魂。

東三河郷開拓団も、もう長いこと、この団の安全を

図つても、このまゝ守ることは不可能であろう。匪賊たちに、満人集団に、ソ連の兵隊たちに、又満州国の公安隊に、自治委員会にと変わるがわるの強要訪問、その度毎に、本部の物品は勿論のこと、各部落も、次々と荒らされてしまった。がらんとした各部屋部屋。食べる物もほとんど強奪されてしまった。愈々住んでいられなくなった時、行先が決定していかないとなると、不安の頂点にたつようであった。老人、幼児の最も多い我が団、五百余人の大世帯で、チチハルまで、避難するとすると、ここから約二百キロ、そんな大勢で一度の移動は、考えても、道々の部落へ宿るだけで、断られてしまうだろう。

家族には、私の家がそうであるように、足腰立たない病人あり、年老いた中風の老人あり、大きなお腹を抱えてあえぎぐの妊婦だつて幾組もある。生れたばかりの幼児を抱えた家族もある。最悪の場合としても、出来るだけ近くの開拓団との合流でもしなければならぬ。私はまず十個団の各開拓団訪問を思い立った。まず隣の義合開拓団では、匪賊の襲撃を受けて、団長

は殺されてしまい、近くの協和開拓団のお世話になっているという。

私たちから一番近いのは、東陽開拓団である。団長は村田勝さん。

私は夜、こっそりと団を抜け出し、黄蒿溝の原野地帯の丈なす羊草の原を通り、東陽開拓団へ潜行した。二十キロくらいの間、道もなく家もなく、只羊草のみが繁茂して、茫漠たる原野地帯と化してしまった。私はこの地を、夜只一人行き来で、限りなく淋しい思いに耐えながら歩いた。東陽開拓団へ、興亜開拓団へ、興隆へ、太平へ、呉山へ、大和へ、協和へと各開拓団の現状を見て廻り、私たちが最も合理的に亡命出来る所と真剣に考えた。当時団を出て、各近隣の開拓団の様子を又中国人部落の様子も見て廻り、お世話になったり、情報掴みに専念した。私は団を出る時、必ず焼米を布袋に五合くらい入れて、首にかけて持ち歩いた。当時妻は二十八歳で、十一歳を頭に四人の子持ちで、その上に妊娠八か月の身重の体であった。更に長女の教子は、三年六か月、生れ落ちた時から、満州風

土病のクル病にかゝり、重度障害児で、物も言えず体も利かず、人一倍難儀したのであった。

黄蒿溝では、匪賊に二回も出会ったけれどその度毎に、羊草の積んだ山の中へもぐり込んで、息を殺してひそみ助かった。まったく不思議と思うくらい、命真加で運の強いのに吃驚する。よくよく寿命のある男として、常に命を投げ出しているの動きに、私の全生命力が宿ったのであろうか。男盛りの体というものは、健康な体と健康な頭脳と滴々たる自信とともに、私心を一切なしにしたところに突破口は開かれるものと確信した。何といつても当時は男三十七歳という、全身是闘魂の固まりと共に、我が開拓団五百余人を自分が助けねば、助ける人はないのだからという、何か盲目的信念の馬鹿者となり下っていたのかも知れない。中国在住の日本軍人を頂点として政府の要人や、警察官の傍若無人の振舞いに対して、少しでも和らぎになればと思うと共に、何事に対しても、日本人と中国人との、あまりにも待遇が違ふことに、人道的義憤を感じて、それに対する弱者への味方的な反発が最大の原因だつ

たのである。

私は日本人への配給物資の米、砂糖、白麵でも、中国人に対して惜しみなく与えた。

そのため、妻には度々「あなたは、私たちより中国人の方が可愛いでしょう」などと皮肉を言われたが、妻も本気ではなく、揶揄と皮肉を織りまぜての言葉であった。私の妻は、私のそうした中国人への思いやりを、私の地が出たくらいに思っていたのであろう。私の行為は、妻との結婚以前からであった。妻は、何事に対しても弱者への味方であり、強者に対しては時として全身的な反抗を示すことを充分に熟知した上で結婚したのであり、それが時々でなく、あまり過ぎるので台所を預る者として時々チェックされるのであった。

応召兵ポツポツ帰る

私たちの団本部は、まだ一回も襲撃は受けなかったけれど、もう全面的な襲撃を受けるのは、時間の問題という感じになってきた。十個団の開拓団情報は最悪の事態を伝え、真先に義合の団長山田憲太郎氏が戦死

された。呉山開拓団の農事指導員上水勝盛先生が戦死され、他にも団員数人の戦死者が出た。太平開拓団の団長土屋智先生他団員の方数人の死亡があった。協和開拓団は、嫩江・平陽・甘南と連絡された縦貫道路であるので、ソ連の兵隊の休息場の様相を呈した重要地帯であった。度々のソ連兵の進駐を受け、太田豊三郎団長も苦勞が多かつたようであった。団長の苦悶の顔が目に見えかぶようである。十個団は、大なり小なり訓練を受けて、何ともいい難い苦しみの日々が過ぎ去って行くのを只祈るのみであった。特に、ソ連兵の進駐は最悪の悪ともいふべきで、彼等はマンドリン銃を片手に、傍若無人、悪鬼羅刹と言つても過言でない。人間離れの悪人共であるといつてもなお足らざるものである。

それでも九月に入つて、興安嶺の麓の私の開拓団など、ハイラル方面から東三河郷応召軍人の筒井康元さんが二人の軍人見習士官の池原茂さん、一等兵の辛島さんの三人で帰つて来て、男の十八人も平陽鎮へ拉致されたまま九月末まで帰らないのが分つているので、

淋しい想いをしていたのほつとしたものであった。その内、団員井本久男、村松小三男、堀弘、橋本義一、乾定治郎農事指導員と、六人もの団員が帰つて来た。

その上、平陽鎮地区で土木請負業をしていた池下兼八さんが、妻の照子さんと息子の求君と助手をしていた石田忠男さんと十三人もの人たちが、帰つて来たり、入団したりで東三河郷開拓団内も心強くなつて来た。

さいわい筒井康元君が、蹄鉄主任をしていたので、団内に沢山残つている草かきを手槍に改造して防衛体制を立て直すことにしたのであった。鉄砲、拳銃などの飛び道具類は、早やばやと中国自治会に渡してしまつたので、みんな淋しい思いで警備していたのだが、槍を持つての防衛は実に心強く、子供たちも三年生くらいから上の男の子は、日夜槍を持つて防衛にあつた。女たちも意気上り、まずこれで最低線の防衛は確保までとはいかずとも、出来上つたのであった。誠に不思議なもので、十八人もの男たちの平陽警察への逮捕者を出し、後の男たちの二十人くらいしかない時は、意気消沈の我が開拓団であつたが、男が十余人増加した

ということとは誠に力強く、素晴らしい安堵感と希望を抱かせるのであった。

花ひらく娘たち

こんな苦しみの連続という時を過していた毎日ではあったけれど、海老町出身の金古誠一さんの連れて来た石田忠男さんの恋愛が、結婚へと進んだ。美代子さんは美しい、しかも活動的な娘さんで躍動美溢れている。

彼女の活動的美人ぶりは開拓団の花としての存在感を誰も認めるところであった。皆のひそかな憧れの星であった。

世にも悲しい日本人開拓者の苦しみの連続の中に、ほのかに咲いた愛の花、美代子さんと石田忠男君のカップルはみんなの心を一瞬春の花園に遊ぶような楽しさに、さそい込んでくれたのであった。

伊藤敬一さんの一粒種の愛娘伊藤さよ子さんと団員原靖君の結婚も、若い美人の娘さん unconditional 降伏後一人身でよくと中国人が嫁にくれとか、或いは匪賊の襲撃を受けた時、娘なればい、と言ひ連れ去られる危険

性も十分に考えられるので、二人をこの際、早く結婚させることにしたのだった。

しかし石田さんは、平陽鎮へ国民党の兵隊が駐留した時、東三河郷開拓団へ十余人の使役の割当があり、平陽鎮に勤務中、八路軍、光復軍の交戦があり、その巻きぞえを食い、あたら二十三歳の青春を一期として、射殺されてしまったのであった。それは二人共結婚して、日なお浅く、彼が結婚という人生最初の嚴肅なる大人の関門をくぐられたという真実は彼への最大の慰めとして、不幸生命を断たれた。

心の底より深く合掌して回向を手向け、敗戦の無惨なる犠牲者に深く心を寄せるものである。

応召兵の嫁さんなどは、大陸の花嫁として強い意志の力によって、北滿のこの地に渡った。そして旬日ならずして、夫が召集され、決戦場へ赴いてしまった。

後に残った大陸の花嫁さんたちの淋しい胸の内を思う時、胸に、きりきりと錐もみされるような痛みを覚える。

生きる素晴らしい命の泉をより大切にすべきである。

現代の開拓団の若者たち、今日一日を、生への愛に生くるとも、誰か何をか言わんや。明日の命は、私たち北満州の地に流浪の若人たち、何人にも明日という日は絶無の世界として生きねばならぬ、環境に打ち捨てられるままの、日本人のなれの果てなのだから。

九月二十日スイシヨウウイの悲恋

北満の治安は、日に日に悪化の一途をたどり、もう私たちの本宮部落も、他部落より頑張って立籠っていたのであるが、部落に立籠っているのも限界に来たので、本部集結は時の問題となつて緊張した毎日を送っているのであった。薄暮の頃、私に対して本部へすぐ来るようにとの伝令が来た。さて今頃何事であろうか。本部へ部落総集結の時期がいよ／＼きたのかなと、急ぎ本部へ馬を走らせたのであった。さて本部へ着いてみると、はからずも意外な事態が私を待っていた。スイシヨウウイさん、この男は前に書いた通り、平陽鎮へ連行された加藤定司さん外十七人の団員の救助作業の時、金本枝屯長と二人で、平陽鎮地方自治委員会々長、張警尉や同公安隊の隊長元国民党退役陸軍中佐の

萬育仙さんたちに対して、加藤定司さんたち十八人の無罪を主張してくれたのであった。前後五回に渡って平陽警察署へ行く時付き添つて行つてくれて、私の心の中よりの話を、ことごとく細いところまで通訳してくれた。その結果、その間い／＼のトラブルはあったが、九月二十九日には全員無罪釈放を約束してくれた。この時、団長も、校長も、その他幹部団員も一人として救出作業に出ず、団員である瀧川辰雄一人が、金本枝屯長とスイさん二人を連れて種々陳情して、いよ／＼許されることに決定してから、四回は全部夜の行動であった。金本枝屯長やスイさんのお陰で十八人の男が全部助かることに決定して、第五回目に初めて昼間行く時に、団の庶務係の金古誠一さんに行つてもらつたのであった。そのスイさんがこもあろうに、在満国民学校長の娘さん、永江妙子さん（当時十六歳）に恋をして、東三河郷開拓団本部を訪れて、妙子さんをスイさんにくれと強引なかけ合いを申し込んだのだつた。永江校長は、勿論妙子さんを嫁になどやるわけにはいかないと断つたところ、スイさんが怒つて、日

本刀を抜いて本部の事務所の机の上にあがった。荒れて困り果てて、瀧川さんならば何とかいうことを聞いてくれるであろうから……というので、本部より四キロばかり離れている本宮部落の私の所へ呼びに来たのであった。私が本部へ馬を走らせると、スイさんは事務所の机の上にあがり、銃を片手に刀をふり上げて演説をしているところであった。本部には、もう部落にいたるのは本宮部落だけで、他の九部落は本部及び本部付近へ全員集結しているので、団長はじめ幹部や家族たちまで事務所の外に集って、事務所の様子を不安気に見ていた。内藤良平さんが、独り事務所の入口に立つて、中の様子を覗き見していたのであった。私は、この様子を見て「誰がスイさんに日本刀など与えたのか」と言うと、内藤良平さんが「実は私がやりました。スイさんが、まさかこんなに荒れようとは夢にも思いませんでした。妙子さんを妻によこせと言つて、どうにも聞きませんので、皆さんと相談して、瀧川さんに頼むより他、鎮静させることは不可能だと判断して、来てもらうことにしたのです。」と言う。「何だ君が日

本刀など与えたのか。君が渡したのなら、その君に全責任があるのだから、私は一切知らぬ。君が解決ついたら良からう。私は黄蒿溝の原野地帯から来るかも知れない匪賊のために、防衛体制を建てねばならないから、私は帰る。本部には、私みたいな者でなくても立派な団長さんもおられるし、伊藤計理もおり、団はじまって以来、常にデンとして一切の面倒を見られる金古誠一さんもおられる。私のような若輩者でなくとも、永江校長は、自分の娘のことではあるし、当然解決の全責任がおありであろうし、四キロも遠くにいる私のところへなど、わざわざ呼び出す必要はない。日暮れ頃は、黄蒿溝方面から来るかも知れない匪賊の警戒に、私の部落は懸命で、今が最も危険な時である。したがって私が本部に長くいることは出来ない。私は帰る。私の部落は九十余人いるのに男は私を含めて六人しかいないのだ。私一人が抜けるということとは部落防衛に最も重大なる打撃を受けることになるので私は帰る。お歴々が大勢集まっている本部で解決せんでどうするつもりか。」と言つて満馬に乗つて帰りかけた。見ると

二百人に近い団員家族の人たちが、本部の建物を出て、全部表にいる。みんなの顔は、唯不安気に、私の行動を一種複雑な表情をとおして見入っていた。関谷团长も永江校長も「瀧川さん、そんな意地の悪いことを言わないで、何とかして下さいよ、家族たちも、見られる通り大勢いるし、もしかの危険も覚悟せねばならない。刀と鉄砲を持っているということは、もしやの不安も大きいし、しかもスイさんは、太平山村の公安隊としての職務執行者であるので、うっかりと手出しはできない。平陽鎮の留置場には、十八人の男たちが留置されている。この人たちもこの九月末には放免という期限付きである。スイさんや金本枝隊長の並々ならぬ努力の結果放免となったのだ。ここでスイさんを処分することは重大な問題である。十八人も男たちが、この問題とからんで処分されたら、東三河郷一の大痛恨事である。瀧川さんとしても仏作って魂入れずになつてしまふでしょう。そうなつては瀧川さんの真意がまったく無になつてしまふ。スイさんの問題は何とかして、でも平和解決より他ない。校長先生の娘さんに対して、

嫁に行つてくれなど強要はできない。団内では一番尊敬している瀧川さんに、何としてもスイさんを説得してもらうより他に、万に一つもないから、是非頼む。」と团长はじめ皆に頭を下げられて、私も何かと不満を爆発しかけたが、他の人たちでは中国人たちに対しての愛の実証がないから、スイさんの説得が出来ないであらう。私が説得解決するよりほか道はないと心に決め、説得への最後の腹を決めたのであった。

その時、鉄砲は全部供出していて、開拓団には一丁もない。もしスイさんが、破れかぶれとなると。彼の弾帯には銃弾が四十発は入っているはずである。どんなに早くスイさんの始末をつけるとしても、もしも撃ち合いにでもなれば、開拓団からの犠牲者も五人や六人は出るかも知れない。万に一つそんなことになることは絶対避けねばならない。応召軍人が帰つて来て、その友人と共に逃げ込んで来た。男の数が増し、しかも軍人だった人たちが来たという安心感から、女たちにも子供たちにも、目には見えぬが、活気が出てきた。よしこれから防衛も頑張れるぞ、やたらには白旗はか

かげんぞ、と防衛に対して気魄のようなものが充ち満ちて来た。ひと頃のようなジメ／＼としたところがなくなつた。そんな団内に、今、水をかけるようなことは、恐いことである。このまま団の活気を九月中、持ちこたえて行かねばならぬ。九月の末には、十八人の男たちが帰つて来る。でも只少し相手が悪すぎる。

太平山村の公安隊の隊士である。この地方としては、日本通の第一人者である。この事件をきつかけにして、もうすぐ帰れる予定の十八人の団員たちの許されて帰る問題に影響が出るかもしれない。あれこれ考えながらも意を決した。鉄砲をそばに引き寄せ、刀を片手に持っているスイさんの様子、私も一瞬たじろぎを禁じ得なかつた。が、もうそんなわけにはいかない。この場の仕儀、何とか静かな解決に持つていくには相手の氣勢を制せなければならぬ。私は意を決して、つか／＼と事務所の中へ入つて行つた。

「スイさん、私だよ。瀧川だよ。」と言つて静かに速く、机の近くまで、彼の横に脱兎の如く寄りそう。スイさんは、私を見て一瞬たじろぐ、私はスイさんの

わずかなひるみを見逃さなかつた。彼の横にびたりと寄りそい彼の刀を持つ手を、はつしと手刀ではたいた。彼は思はず刀を取り落す。その刀を拾う。スイさんの喉元へ左手で突きつける。それは自分でもわからぬほどの早業でサッと一瞬攻守とくろを変えたのであつた。「スイさん、何ということを出かしたのだ。如何に敗戦国の人間でも人には人の道がある。君が如何に妙子さんに恋をし、愛を感じたとしても、強引に妙子さんを手に入れようなどと以ての他である。今は君が承知している通り日本人の大受難の真最中である。今日の命は今日の命にあらず、明日の日生ありや否やの瀬戸際に立つている私たちである。私たちと同じで妙子さんとしても、日本人受難のこの修羅場を如何にして生きて乗り切ることが出来るであろうかと、頭の中には他のことは一切考えも及ばない状況である。君もあまりにも非常識すぎて、私は泣きたくなるくらいである。私とて君との交遊友情も深くしており、君の気持がわからぬではないが、この動乱の中では他のことを考えるということとはとても出来ぬ相談である。ど

うか君も冷静になってくれ」と言い聞かせて、内藤良平さんに麻縄を持って来させて、スイさん許せと縛り上げた。スイさんは、もはや観念して「瀧川先生、私は病気の時には先生に助けられた。お陰でこの世に今日まで生きて来られたのです。私が黄蒿溝でチフスの時、先生に会わねば、私は当然死んでしまつて、この世にいない身体です。私は瀧川先生に命をいただき、瀧川先生によつて今日命を終る。それも運命の神さまのおぼしめしでしょう。瀧川先生に命を奪われても、誰をも恨みません。それが私の運命だからです。只瀧川先生だけには、こんな姿を見せたくはありませんでした。」とスイさんは私に対しては絶対に反抗的態度は示さなかつた。

当時本部へ集つていた団長、幹部、団員等が皆事務所へ入つて来た。私は「スイさんの処分は私が考へて行ないますから、私に一切まかせてくれますね。」とやや強引に出た。

スイさんの処分をまかされた私は内藤良平さんと部落へ帰り、皆で夕食を馳走し、今後東三河郷開拓団へ

は顔を出さぬよう誓わせて放ちやつたのであつた。

九月二十九日瀧川銃殺寸前救わる。

この日、私にとつては終生忘れることの出来ないような事件が起きた。朝起きると間もなく、ソ連の東陽鎮駐在司令部から、ソ連の司令官と公安隊の連中が自動車で乗りつけた。早速集合命令が出て、いつもの如く男と女子供と別々に集合させるのであつた。

ソ連の司令官曰く「昨日この団の者が、戦勝国の良民に対して、敗戦国の者が危害を加えた者がいる。そして危害を加えられた中国人は死亡した。実に言語同断である。その者を今すぐ出せ。もし出さぬ場合には全員逮捕して拉致する。」と言ふのだつた。

九月末の太陽は早くも西に没し去り、四面が次第に暗黒の世界と変わりつゝあつた。はるか地平線の彼方にはどこで燃すか、はたまた土匪匪賊たちの襲撃に燃ゆるのか。

ああ、今夜も、どこかで開拓団が襲撃を受けているのであろうか。

もう十時頃であらうか。

ぼつぼつ来る時分だぞと、丸山智易さんのつぶやきを合図のように、農産物加工場の彼方に灯火が点々と明滅する。それ行け。手ぐすね引いて待っていた私たちは、羊草の繁みなど利用しつつ進んだ。百メートル、五十メートル、二十メートルくらいのところから一斉に、「ワー、ワー」という関の声を上げて、突進した。彼等は周章狼狽して、混乱しつつも、戦利品だけは大車に積み込んで、右往左往しながら雲か霞と逃げて行く。私たちは、その場に残っている連中が、まだ逃げそびれているかもしれないと思って、加工場の中を見ようと角を曲った出会い頭に、小さい男が、バケツに一ぱい味噌を入れて出て来た。私はとっさに槍を突き出した。小男の横腹にブスリ！。男の悲鳴に思わずハッとして見直す「しまった。」と私は叫んだ。この時、私と一緒にだったハイラル方面から逃げて来て、団の中にいた辛島一等兵が、彼の体を投げ飛ばした。その後在満国民学校の七原忠雄先生が又投げたので、ぐったりと伸びてしまった。その小男の腸がぐつと露出して、ウン／＼とうなっているのがあった。私は自

分の見境のない槍先に茫然とした。丁度その小男の父親らしい老人が、若干の味噌のはいった桶を乗せて佇んでいる。みんな小男を大輪車に乗せ、持っていた戦利品の味噌やたまり、塩など乗せてやり、早く帰れと言つて帰らせた。老人は只おろ／＼としながら大輪車の上に乗る、手綱さばきだけはあざやかに、私の顔を無表情で見つめながら黙々として帰って行つた。私はこの小男の腸が傷口より出かかっているのを見た瞬間「しまった」と思い、不吉な予感に胸の潰れるような思いがした。「これは大変なことを仕出かしたぞ」と、思った。みんなは味噌、たまり、塩などの盗人を追いつたので意気揚々として、団本部へ引揚げた。各自終戦以後、自重自重で出来るだけの無抵抗主義を以て、中国人に接していたが、今夜は太平山公安隊の許可を受けてのこらしめの闘争であったので思い切り荒れることが出来た。実に久し振りで、の武勇伝ですっかりと溜飲を下げたのであった。

私が皆さんにくどくど言っていた言葉とは裏腹に、まっ先に中国人を殺してしまった。あの重傷では生き

ていることは出来なからう、一人みんなと離れて、さまざまな自分の最期の姿を描いて見る。人間という動物はある時、突然のように、自分の意識しない意識によつて、悪魔の勝鬨に心良く陶醉する時があるのだろうか、と心と心に問いたです。

かえつてくるものは空しく胸にひびく、うつろな心のみ。

それは反転又反転、寝苦しい一夜、雑魚寝の団員家族たちの寝息のみが妙に淋しく、深く食い込んで、私の心の奥をかきむしる。

私は皆さんに迷惑をかけてはいけなないと、すぐソ連の司令官の前に出た。「私がやりました。誠に申しわけないことです。しかし貴官は、昨夜の食糧強奪土匪団を、良民だと決めておられるようですが、彼等は徒党を組んで私たち開拓団の農産加工場へ押入り、大切な食糧を強奪した連中である。私たち開拓団の者も、食糧なしでは、これから冬に向う時期であるし、大勢の老人や婦女子を抱えた日本人開拓者たちが生きていけません。日本国敗戦の今日、日本人の働く場はほと

んど見当りません。自分達が作り上げた食糧を農民自身が確保のため、自衛するのは当然ではありませんか。私たちは他人の物を何一つとして強奪しようなど思いません。一年間を働き抜いて、作り上げた汗の結晶を守らんとするのは、農民としての当然の権利ではありませんか。その意味においても、盗賊たちを許すわけにはいきません。只少しおどかして追い払う予定でしたのに、たまたまあまりの小男だったので私の手元が狂い、腹を突いてしまったのです。この件については大平山村の公安隊にも願い出て許可を受けてあり、大義名文もはつきりしております。」と、私は必死で反論を展開したけれど、戦勝国と敗戦国の差で、彼等は言う。「銃を持って来たならば、土匪匪賊といわれるけれど、銃を持っておらぬ者に賊とはいわれぬ。彼等は、中国の良民であり、貴殿達は日本国の侵略者集団である。戦勝国の良民に対して、敗戦国の日本人が殺人を犯すことなど、絶対許すことは出来ない。」すぐ後手に縛られて、自動車に乗せられ連行されたのであった。

かえり見れば今日という日は、八月に起きた加藤定

司他十七人の許されて帰る日である。その日に、私は殺人罪で連行されて行く。運命の変転皮肉正に極まりというところか。加藤さん達は幸いにも、中国人を六人捕縛して来たというだけで、一人も殺してはいない。それにひきかえ、私は中国人を一人殺している。

恐らく死刑は既定の事実として、免がれまい。栄枯盛衰の常なりといえど、実に残念の極みである。さらば我がいとしの妻よ、四人の子供たちよ。大勢の友人たちよ。あれほど日本へこの足で、しっかりと郷土の土を踏みしめるまではと、生きることに尽くして来た我が魂よ。さようなら。私が自動車で連行されるのを、妻も子供たちも、遠い野菜貯蔵庫へ年越しの野菜を貯蔵しながらじつと見ている。恐らく妻の心は大きく波打ち立ちさわいでいるだろう。この日から二度と会うことも出来ない死の世界への一步であることを承知なのだから。長男と次男はもうことの成り行きが、いくらか分る年令に來かかっている。妻とちらつと視線が合ったが、表情は変っていないようである。心の奥底では、深いさようならを言っているはずである。七原

先生も、辛島一等兵も、日産貨物自動車の上にいる私を追って来る。七原先生は大声で、「瀧川さん、あなたの妻や子供は私が命のある限り必ず日本へ連れて帰るから。」と。遠くかすかに団本部の姿が薄くなり、視界からまったく見えぬようになる。

私は自動車に乗せられて、八キロばかり離れた東陽鎮寄りの新立屯という中国人部落でおろされた。私が槍で突いた男は新立屯部落の部落民であった。男は虫の息ではあるが、まだかろうじて生きていた。内臓が露出して周囲一面異様な臭気が鼻をつく。年老いた老人は父親であろうか。息子のそばに只呆然として痴呆のように佇む。私は老人の顔を見て、ドキッとした。嗚呼、国におわす我が父親と同じくらいの年令で、もしもこの状態が私ならどうであろうか。「誠に相済みぬことをした。」と心の底より深く深く頭を下げて許しを乞うた。

新立屯の民衆は、私を包囲して、口々にののしり、鉄拳の雨を降らした。鉄拳の洗礼の後、今度は石礫の洗礼を受けた。石などこの地方にはまったくなく、石

礫の洗札だけは、まさかと思つたのに意外であつた。

この石礫の洗札に会つても、私の肉体は痛さを感じなかつた。たしかに生命の終焉を覚悟したからであるか。部落民は、男も女も子供たちも集つて、喧々譁々げげんごうごう泡を飛ばしての論戦である。

叩き殺せ、ブン殴れ、百叩きにせよ、耳をそげ、鼻をそげ、銃殺するのが当然だ。私の周囲は罵声の嵐である。公安隊長は「この男が新立屯の良民を殺した。

諸君の指示通り裁定を下すものである。」とこゝに民衆裁判は決定した。大多数の聲が銃殺刑を言う声である。「それでは諸君の聲が一番多いので銃殺刑に処す。」と隊長の宣言がなされたのであつた。最高の蔽罪刑に只死あるのみの身の上となつたのである。いよく死刑執行が目前にせまつた。

ソ連の司令官が、正面から拳銃をピタリと向ける。左右から公安隊の隊士が鉄砲の筒口を私の体へ。

ソ連の司令官は白布を取り出して私に渡しながら、何か家族への伝言があれば伝えてやるから何でも言いなさい。と言う。私は「すでに覚悟を決めているので

何も言うことはない。撃て。」と、司令官は白布で目

隠しをしなさいと言う。「私は日本人だ。この期に及んで目隠しなど必要ない。撃て。」と言ひ、只心の底にて、静かに般若心経をと念えるのみ。生もない、死もない、恐怖もない。まったくの無心そのものである。

やがてズドンというにぶい音の瞬間に自分が自分ではなくなるのだ。個体と化した一つの物体が、ごろりところがれば一切が終るのである。まったく別の世界への旅立ちの瞬間への空間とは……、この時、声がかかつた。

「司令官、待つて。」と女の人の聲が、男の人の聲が、女性の聲、男性の聲が交錯して、はつきりと、私の耳は捕えた。ソ連の司令官も、公安隊の死刑執行人も、そして私も、群衆も、一斉に声の方を見つめる。最初声をかけた女性は、元馬賊の頭目だった人の妻で、夫の死後も女頭目として緑林のこの地方の女王として活躍したという人である。ルウエンシャンという当時五十歳をやや越したと思われる姉御である。次に新立屯の屯長、李樹臣りじゆじんさん、同新立屯の長老である徐先生じゆせんせいの

三人で、この新立屯の純粹の住民である。この三人が不思議にも同時に声をかけてくれたのであった。「瀧川先生は好人で、こんな良い人を殺すのは、誠に残念だ。彼は好人だから誰かの身代りに来たのであろう。きつとそうだ、それに違いない、瀧川先生は、昭和十五年二月に三合屯へ来たけれど、他の日本人たちとは違い、来る早々、私の家へ来て、いろいろと話し合ったり、ギョウザやシリアルピンなぞ食べてくれ、来る度毎に日本から持つて来た自分の物を、いろいろとくれ、気を使った交友をしてくれたものだ。誰にも平等の交遊をしてくれ、親切で本当に良い人だ。家族が来てからは、日本から持つて来た布や着物なども下さった。贈り物もおたがいにし合った仲であるし、瀧川先生が、中国人をいじめたという話は、今まで一度も聞いたことのない決して悪い人ではない。一と言ってくれた。李樹臣屯長も「瀧川先生は最も親愛なる友人であり、日本人でも良い人は良いのだ。私たちは、農民であり、日本人瀧川先生も農民だから、瀧川先生のよくな良い人を殺すなんて、絶対私には受け取れない。」

と言ひ、群衆の中からも「李屯長や徐長老、ルウ姉御の言う通りだ。私も瀧川先生には、いろいろとお世話になった。瀧川先生の太太タイタイも良い人で、時々日本から持つて来た布や食物をもらった、とてもやさしい親切な人で、子供が病気の時など、瀧川先生のお陰で、診療所へ連れて行ってもらひ、鈴木大夫（医師）に見てもらったり、葉ももらつて、お陰で元気になった。子供の命が助かり本当に有難かつた。診療所の鈴木大夫は怖い人だったが、瀧川先生に口を聞いてもらえば、何でも言うことを聞いてくれた。大夫とも大の仲良しで。」と次から次へと良い人という声が圧倒的に飛び出し、いま死の宣告を受けたばかりの瀧川とまったく一変して、好人瀧川先生という声ばかりとなり、不可思議な魔術のように、万死の瀬戸際から一足飛びに生へのさずなを、はつきりと掴んだのであった。群集心理の魔術とも思える生命力の不思議な変化によつて、死の瞬間を越えて一足飛びに生へのさずなを掴んだのだつた。自分ながら運命の不可思議な魔力に、夢見る心持ちであつた。私は殺した息子の供養として、この

老翁のために二万円を贈ることにして、使いを東三河郷開拓団へ走らせた。急を要する場合のため保健指導の妻であった鈴木すみゑさんが自分の金を出して下さった。

内藤良平さんが馬に乗って使いの中国人と共に、私の乗馬を連れて迎えに来てくれた。

李屯長、徐長老、ルウ姉御も部落民も合同での命の祝賀会となったのだった。

がらりと態度の変った部落民たち、女も子供も集つて来て、瀧川先生のために乾杯しようというので、ルウ姉御の音頭で何回もの乾杯である。

私の無罪放免を祝福してくれ、私が殺した彼が私と同じ三十八歳であるから、彼の生命が、瀧川先生に計算され倍になるから合わせて七十六歳までは生きることが出来る。それから先は、瀧川先生の善意次第である。今度は徐長老の音頭で乾杯させられたのであった。

私は、元來酒は強い方ではなく、酒を飲むということは相当の負担であったが、乾杯好きの中国人が、誰からともなく、瀧川先生の命のために乾杯、瀧川先生

の太太のために乾杯と白酒六十五度の支那酒での乾杯に、正に男の冥利に尽きるものであった。

いくら歓待されても、頭の中には、重大なる人間的配慮のなかつた罪は、私の今後の人生行路にことある毎に浮かんで、消えることのない想いを残すことであろう。私が不用意にも一人の中国人を槍で殺したという真実は、これ又永久に、生きてこの世に在る間中、私の心の何処かに刺の如くつきささつて、消えることなき心の重荷として残ることであろう。私はこのように生を与えられた。

新立屯部落へ連行された時は、もう東三河郷開拓団の皆さんに、二度と相まみえることはかなわぬことと、観念の目を閉じていたけれど、首一重の瞬間を助けられ、内藤良平さんの連れて来た馬に乗り、薄暮の道を三合屯の本部に帰れば、同志たち、女も老人も子供たちも出迎えて大喜びである。足があるから、幽霊ではないらしいなど、嬉しい悲鳴をあげて歓迎された。この日、平陽警察に連行されていた十六人の団員が許されて帰り、あとの二人は若干おくれて帰って来たので

あつた。団の誰にも手助けさせずに無事で帰つて来た。無条件降伏以後不幸続きであつたけれど、九月のうちに一切治まつて、ほつと安堵の顔をほころばすのであつた。

わが手許狂いて刺せし横腹の腸露出してひたに苦しむ

父ならむ八十余歳の老翁は息子を抱きておろろたたずむ

老いたまう故国の父に思いして悔悟の想い胸をつらぬく

老翁の悲痛の眼吾れを射れば只ひたすらに許し乞うのみ

我がからだ石礫飛び罵声飛び身心ともに無惨となりぬ

銃口は三か所より向けられて死刑執行まさにはじまる

目隠しは必要なしと拒絶して精一ぱいの意気を見せたり

ルウ姉御銃殺ストップの声ありてわれ

現世に蘇り生く

死の世界生の世界と踏みかえて命の泉

浪々と湧く

民族の違いはあれど真の友持てるためし

あり生き帰される

妻も子も涙おぼろの夕間に抱きて生を

たしかめ合ひし

さらば三合屯よ

昭和十五年二月十一日、入植し、それ以来限りなく愛し、限りなく育て上げて来つた三合屯の我等が農に生きる土地。もうどうにもならない。朝起きれば匪賊、夜になれば土匪、公安隊や自治委員会と名の付く略奪者たち。その上、ソ連の兵隊たちの女あさり、拳銃や自動小銃片手にの強迫と。特に、ソ連の兵士の女性への要求には始末が悪いのであつた。私たちは、強奪襲撃などの最悪状態に出会つたこともない日本人として、或る日突然のように様変わりを見せた北満の大地。只呆然とするばかり。中国人たちに教えられて、必要欠くべからざるといふ大切な物品を、地下に隠し

ておいても、中国人は百も承知で、匪賊など銃を突きつけて、ここ掘れワンワン式で、殺されては元も子もない、命令に従って掘る。折角大事な物として隠して置いた物が出る。それを公安隊士でも、自治委員会の会員でも、平然として肩にかついたり、体に巻きつけて、有難うとも言わずに行ってしまう。一体何のために思いをこめて隠したのであろうか、と悲しむ。そんなくり返しをしている間に、もう何もなくなってしまう。明日から私たちは、どうして生きていくのかしら。もう米もない。塩もない。砂糖など、とうの昔になくなってしまった。フトンもない。ピューピューと北風寒く、雪も降るようになってきたのに。みんなまったく着たきり雀で、着がえもなく、寒さにふるえるのみとなつて行く。あらゆる物資が、あたかも清掃されたように持ち去られてしまった。私の古傷が痛む加工場にも、今は何もなく、唯がらんとした空屋となつてしまい、窓という窓は硝子もなく、折から吹きつる北風にゆれて、窓枠だけが時折ボタンボタンと、いとも淋しそうな音をこれ見よがしに聞かせている。廃

墟となったような淋しさが、寒々と私たちの胸の奥まで、氷のツララのような研ぎすまされた利剣のような冷えびえとしたおぞましきで、ぐいぐいと心の奥底まで食いこんでくる。

何という陰惨な別離であろうか。北滿の十月といえば、零下の大地は凍り、吹く風は肌に突きささって吹きつる、思わず肌に粟を生ずるほどの冷厳さである。東三河郷開拓団員家族併せて四百有余人、太平山村の公安隊隊長金本枝さん以下五人の公安隊隊士たちに送られ、三合屯の中国人大勢の好意に見送られ、三合屯の友人の好意の大車三台の提供を受け、老人、病人、妊婦、負傷者を二台の車に乗せ、一台の大車には百四十余戸の全財産を積み込み、男たちは、前後を囲みつつ、二合東三河郷開拓団草創の地との決別であった。さらば三合屯の地よ。苦しみ抜いた六年の歳月が走馬燈のように儼に浮かぶ。苦しみ抜いて建てた新築家屋。新しいが故に暖かからず、朝起きると、温穴床には、寝ている枕元に立ち氷がざくざくとして張っている。思わず身震いするほどの寒さであった。開拓地の

農地など、それぞれの農作物が、房々とした実りの秋にそなえて収穫を待っていてくれたのに。今は悲しみの頭を垂れて、誰も手を付けてくれる人もなく淋しさを顕わにしてぼつんと立っている。あの穂波の悲しみに充ちた顔、もうこの三合屯の農地で、二度と見ることはあるまい。この地、この風景、私たちが青春を思い切りぶつけ合った、この地の地元の人々、満州の友達よ、おたがいに胸襟を開き合って語ることが出来るようになって間もない頃が、心からなつかしい。

次から次へと、止めどなく、それは統一された意識の中でなく、只ばらばらの姿のまま、私の瞳の中へ現われては消えて行く。無量の想いが去り難く、切々として胸をえぐられるようである。特に、私達としては、苦しみの連続の内に完成された在満国民学校の赤煉瓦が焼きつくように目に痛い。二か年もの連続の水害の大痛手のために、同時に入植したどの十個集団の開拓団よりも、はるかに諸施設が手おくれになった。六年間の希望と夢と執念と喜びと悲しみの渦巻き叫ぶ三合屯の地。淋しくも第二の故郷を後に残して立ち去る私

たちへの挽歌が、悲しいひびきを伝えてくるようだ。

東陽開拓団へ亡命して、果して落着くことが出来るや否や。それは神のみが知る未知の世界である。そうと知りつつも、なお落ちゆかねばならない運命の十字架を背負った私たちは、戦いに破れ去った敗戦国の農民集団である。

私たちが、開拓団農地を捨てたということは、はるか昔のかたり部なれど、源氏に追われた平家の一族とあまりにも酷似しているのではないだろうか。我々の民族の国土ならざる、周囲皆敵の中の落人ともなれば、大かける地も、地下にもぐって隠れひそむ地も、氏もなく、在るものは、北滴の広野のみ。もっともっと厳しい現実が待ちかまえているだろう。そんな境遇もあって覚悟の上で、なお落ち行くより他、まったく道の尽き果てた私たち敗残者の運命であった。

東陽開拓団まで、三合屯より二十余キロ、これも果して無事に到着出来るや否や、まったく未知数ながら、金本枝太平村公安隊長は張り切って私たち日本人開拓団団員家族集団の落人部隊に対する最後の心尽しとし

て、隊員にあれこれと注意してくれる。私は、彼がいの限り、必ず大丈夫東陽開拓団へ無事に到着出来るものなりと信じており、全面的にまかせていた。

金本枝さんは、入植以来、困難を極めるような時、只だまって助けてくれた。広い心と根深い信念を持った何事に対しても頼まれれば絶対後にくくことのない、日本式というならば昔の俠客道を持ったような男であった。そんな金本枝さんを、どこまでも信用して、全面的にまかせきり、途中何事もなく、この東陽開拓団まで送りとどけてくれた。私は金本枝隊長や隊員に心の底から深くお礼申し上げたけれど、まったく無一人の人間集団の私たち、お礼に差し上げる物は一物もなく、只々感謝の言葉だけであった。金隊長は笑って「私と瀧川さんは三合屯へ来て以来の日本人としての本当の友人であります。これで瀧川さんへの私の義務は果した。只々皆さんの一人でも多く日本へ帰ることが出来ることを願うのみです。さようなら。」と、隊士を連れて引き返して行ったのであった。

東陽開拓団では、まだ一度もソ連にも、公安隊や自

治委員会にも、匪団にも見舞われたことがなく、東三河郷の者とは違い、意気軒昂たるものがあり、私たち敗残の身にいろいろといたれり尽くせりのお世話をして下さった。その夜は三か月ぶりに身も心も、大きな風呂で洗い流し、安心して四百有余人の敗残亡命者たちも、まったく土匪匪賊に襲われる心配もなく、夜の夢が結ばれたということは、三か月余に亘る不安、焦燥、困憊に明け暮れた身には、あまりにも楽しき一夜で、明日の月、果してどうなるか。今夜一夜の楽しさを、おたがいにしみじみと味わい尽くすのであった。

三合屯との別れ

霏霏^{ひひ}として粉雪寒き開拓地永遠の別れ

か涙も凍る

見渡せば穂波穂波の黄金波我が労作の

糧とのわかれ

六年間この地に夢を託せしも今日を限

りの命ならんか

手をふりて別れおしめる満友の頬に涙

の伝わりつあり

落ち行きていずこに屍さらすやら生への保証さらさらあらず

全戸数百四十六戸家財なれ大車一台積
込つきぬ

執筆者の横顔

八十六歳の瀧川翁は、きょうも自転車のペダルを踏んで、山の仕事の現場へ出かけられる。木材を扱う今も立派な現役で、かくしゃく人生である。また余暇を利用して菊づくりの趣味を持たれ、毎年秋には、同好会員の責任者として、丹精こめた数百鉢の見事な菊の展覧会も開催される。その人生への生き方は、まことに新城市民の鑑である。

瀧川さんは、昭和十四年、三十二歳にして、当時の国策にそい満州開拓団の一員として渡満、北満大興安嶺を遙かに望む大草原「三合屯」に入植し、東三河郷開拓団（一四六戸・五二九人）の強力なメンバーであった。しかし運命の敗戦八月十五日を迎え、それ以後三百余人の老幼婦女子をかかえ、筆舌に尽くすことのできない悲惨な日々を続けられた。多くの仲間を失い

ながら生死の境をさまよい、昭和二十一年十二月、念願の故国の土を踏んだ。戦後の混乱の中を引揚げ者として、段戸山、裏谷の開拓地の生活を皮切りとして今日に及んでいる。私は帰国後、半世紀に及ぶ瀧川さんの生活を顧みて、その中核に常に壮年期逆境の中で過した「満州開拓団」があったと思うのである。北満の地でいのちを失った多くの団員の慰霊と、現地に残る同胞への思い、開拓団の足跡を後世に残して日本の平和への礎にしたいという悲願を貫いた生き方である。

昭和四十六年、市内桜渕公園の一角に、東三河開拓団慰霊の「拓魂碑」が完成し、東三河開拓団の碑を永久に残された。

さらに、この悲惨な歴史的事実を、ありのまま、に記録に止めたいと、昭和五十一年に、旧満州開拓団受難記「この足で故国の土を踏みたい」三〇〇ページを出版し、昭和六十二年には、幼少の頃からの自叙も含めて、「愚かなる者の旅路」一五八〇ページを自費出版された。並々ならぬ情熱である。

日中国交回復後は、二度にわたって中国を訪問し、

三合屯で現地慰霊祭を行った。現地に残って生存されている十二人の同胞も探して涙の対面激励をされ、その後残留孤児のお世話もされた。また里帰り実現のため、身よりのない方のためには、里帰りに当って率先して親代りもされた。

いま、この瀧川さんのお姿は、まことに神のように神々しくうつるのである。数年前、この人生体験を市内校長会、及び生涯学習シンポジウムに於て語って頂いたが、多くの市民に大きな感動を呼びおこした。

瀧川辰雄さんはこのような方である。

(新城市教育長 中西 光夫)

「父さんはどうとう帰って来ませ
んでした」

福岡県 江 頭 ふみ子

大正七年二月十一日、福岡県嘉穂郡桂川町三千百九

十番地に於て出生いたしました。

私は祖父に当る佐々木鶴吉の養女となることが母と父との結婚をする時から、決まっていたそうです。お産を済ませた母は直ぐ満州へ帰ることになっていたのですが、当時世界的に大流行をきたしていたスペイン風にかかり、産後引きつづき床についてしまい、祖母は私を抱えて、あちらこちらと貰い乳に回ったと、大きくなった時まで、苦勞話をしていました。母は産後のこととて非常に重体が続き、何年も床についたきりの状態だったそうです。それ故離婚をすることになったと祖母から聞いております。二度目の父は矢張り満州撫順炭鉱に勤務する実直そのものと云った人でした。

昭和二年母、祖母、私を迎えに来てくれた、二人目の父を見たのはその時、私の五歳の時でした。

母のお腹の日以来五年振りに帰って来た撫順は何とはなしに親しみのある所に感じられたような思いがいたします。それ以来私は可もなく不可もなく、祖母の愛情に育まれ、撫順東郷幼稚園、撫順永安尋常高等小